

平成30年度 島根県立大学 一般入試（前期日程） 個別学力検査試験問題

国 語

【試験時間 90分】

注意事項

1. 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題は1ページから17ページまであります。開始の合図があった後、問題冊子を確認し、印刷不鮮明の箇所などがあつた場合は直ちに申し出てください。
3. 解答用紙は6枚あり、問題冊子とは別になっています。また、解答は縦書きで記入してください。
4. 受験番号、氏名は6枚の解答用紙の所定の欄すべてに記入してください。
5. 問題冊子の余白は、下書きに利用してもかまいません。
6. 試験時間中の退出はできません。
7. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

第一問 次の文章は、向田邦子の『かわうそ』である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

指先から煙草が落ちたのは、月曜の夕方だった。

宅次は縁側に腰かけて庭を眺めながら煙草を喫い、妻の厚子はAザシキで洗濯物をたたみながら、いつものはなしを蒸し返していたときである。

二百坪ばかりの庭にマンションを建てる建てないで、夫婦は意見がわかれていた。厚子は不動産屋のすすめに乗って建てるほうにまわり、宅次は停年になってからでいいじゃないかと言っていた。停年にはまだ三年あった。

植木道楽だった父親の遺したものにだけに、うちは大したことないが、庭だけはちよつとしたものである。宅次は勤めが終わると真直ぐうちへ帰り、縁側に坐って一服やりながら庭を眺めるのが毎日のきまりになっていた。

暦をめくるように、季節で貌を変える庭木や下草、ひっそりと立つ小さな五輪の石塔が、薄墨に溶け夜の闇に消えてゆくのを見ていると、一時間半の通勤も苦に思えなかった。文書課長という、出世コースからはずれた椅子も腹が立たなかった。おれの本当の椅子は、この縁側だという気がしていた。

厚子も夫の気持が判っているらしく、いつもは二言三言で引き下るのだが、この日は妙にしつこかった。宅次もいつになく尖った声で、

「マンションなんか建てたら、おれは働かないよ」

と言いつ返した。

指先に挟んだ煙草が落ちたのは、そのときである。

風かな、と思った。

ふっと風にもってゆかれた、そんな感じだった。

「風があるのかな」

宅次は呟いた。

「風なんかないでしょ。風があれば、洗濯もの、乾いてますよ」

厚子は縁側に出てくると、自分の人さし指をペロリと嘗め、蠟燭を立てるように立てて見せた。

「風なんかありませんよ」

九つ年下の厚子は子供のいないせいもあるのだろう、年に似合わぬいたずらっぽいしぐさをすることがある。西瓜の種子みたいに小さいが黒光りする目が、自分の趣向を面白がって躍っているのを見ると、宅次は煙草のことを言い出すのが億劫になった。

指先の煙草を落してから一週間目に、宅次は起きぬけに朝刊を取りにゆき、茶の間へもどったところで、障子の棧につかまりながら、わからなくなった。

脳卒中の発作だった。

頭のなかで地虫が鳴いている。

倒れてからひと月になるが、地虫は宅次の頭の、ちょうど首のうしろあたりで、じじ、じじ、と思いついたように鳴いていた。

意識が薄れたのは、ほんの一時間ほどだったが、それでも右半身に軽い麻痺が残った。杖にすがればどうにか歩けるが、右手はまだ箸が覚束なかった。

厚子が鼻唄を歌っている。

宅次が倒れてから、厚子はよく鼻唄を歌うようになった。病気は大したことないのよ。そのうち、きっとよくなるわよ。あたし、決してBヒカンなんかしていないわよ。そういう代りに鼻唄を歌っているように見えた。

顔の幅だけ襖があいて、厚子が顔を出した。

二十年前と同じ笑い顔だった。指でつまんだような小さな鼻は、笑うと上を向いた。それでなくても離れている目は、ますます離れて、おどけてみえた。何かに似ている、と思ったが、思い出せなかった。病気のせいなのか、脳味噌のほうも半分分厚い半透明のビールをかぶったように焦^じれたくなる。

こういうとき、頭のなかの地虫は、じじ、じじ、と鳴くのである。

厚子は赤いクリーム・ソーダを飲んでいる。いい年をして、ストローをぶくぶく吹くものだから、アイスクリームのまざった赤く色のついたソーダ水は、白いあぶくが立っている。

厚子のくわえているストローは、縦にひび割れていたらしい。割れ目から、赤いソーダ水が溢^{あふ}れてきた。

「よせ。吸うのはよせ」

今度血管から血が溢れたら、おれは一巻の終りだ。

叫ぼうとするのだが声が出ない、というところで揺り起された。

夢かうつつか。つなぎ目がはつきりしなくなっている。新婚の頃、デパートの食堂で、ソーダ水を飲んでいて、厚子のストローがひび割れて、いきなりソーダ水があふれてきたことがあったような気がするが、色は赤だったか青だったのか。

厚子は、いつの間に着替えたのか、よそゆきの着物を着て、布団のすぐ横に坐っていた。

「この間から、話してたあれ、出かけて来ますね」

あれと言われても、とっさには思い当らない。

高校のときの先生が、(ア)勲章^{勲章}をもらった。同窓会でお祝いを上げることになったので幹事だけでデパートへ下見にゆくというのだが、そんなはなしは初耳のような気がする。

「お三時はメロン冷えてるけど、帰ってからでいいでしょ」

厚子は、着やせのするたちだが、脚の太いのを気にして、気の張る外出はいつも和服である。それはいいのだが、相手によって袴元が二段階に分かれていることに、宅次は前から気がついていった。

宅次や親戚の女たちと出かけるときは、格別胸元を取りつくろうことをしないが、よく見られたいときは、胸をぐつと押し上げるような着付けをする。

細い夏蜜柑の木に、よく生ったものだと思うほど重たそうな夏蜜柑が実っているのがある。結婚した当座の厚子はそんな風だった。さすがに四十を越して夏蜜柑も幾分小さめになったようだが、ここ一番というときになると、厚子は上に持ち上げて、昔の夏蜜柑にするのである。

これから逢う相手は女ではないような気もするが、この病気の特徴は、ひがみっぽくなることだと書いてあった。気持を鎮めなくてはいけない。腹を立てないのが一番の薬と主治医の竹沢に言われている。

厚子のおろしたての白足袋が、弾むように縁側を小走りにゆくのをみると、気がつかないうちに、おい、と呼びとめていた。「なんじゃ」

わざと時代劇のことは使いで、ひよいとおどけて振り向いた厚子を見て、宅次は、あ、と声を立てそうになった。

(1) なにかに似ていると思つたのは、かわうそだった。

デパートの屋上でかわうそを見たのは、何年前のことだったか。

昼休みにぶらりとのぞいた、子供のための小動物を集めたコーナーのプールに、二頭のかわうそがふざけていた。

どちらが牡でどちらが牝かわからなかったが、二頭ともじっとしているということがなかった。水に浮かんた木の葉を魚にでも見ただてているのか、わざと物々しく様子をつくつてぶつかつてゆく。

そうかと思うと、ポカンとした顔をして浮いている。ポカンとしている癖に、左右に離れた黒い小さな目は、C ユダンなく動いて

いるらしく、硬貨をじゃらつかせて餌の泥鰻入れに近寄る気配を見せると、二頭は先を争って、泥鰻の落ちてくる筒の下で、人間の手のような前肢をすり合せ、キイキイとにぎやかに騒ぎ立てDサイソクする。

厚かましいが憎めない。ずるそうだが目の放せない愛嬌があつた。

ひとりで体がはしゃいでしまい、生きて動いていることが面白くて嬉しくてたまらないというところは、厚子と同じだ。一軒おいて隣りから、火が出たことがある。

幸い大事には到らなかつたが、

「火事ですよお。火事ですよお」

寝巻で空のバケツを叩き、隣り近所を起して廻っていた厚子は、そばで見ている気がひけるほど楽しそうに見えた。

宅次の父の葬式の時もそうだった。

厚子は新調の喪服を着て、涙をこぼすというかたちではしゃいでいた。ほうっておくと、泣きながら、笑い出しそうな気がして、宅次は、

「おだつな」

とたしなめるところだった。

おだつ、というのは、宅次の田舎の仙台あたりで使うことばで、調子づく、といった意味である。

右手でふたつの胡桃を廻しながら、宅次は庭を見ていた。胡桃は、右手の麻痺の恢復にいいと聞いて、厚子を買ってきたものである。

ひとりで眺める庭は（イ）慰めにならなかつた。

志を得ない勤めの鬱憤を胸に仕舞って、うしろに厚子がいてなんやかやと（注1）半畳を入れながら眺めるから、よかつたのである。

る。

学校の休み時間と同じであろう。

勉強のあい間に、五分かそこらだから、仲間がいるからボール遊びも面白いのだ。一日中遊んでよろしいといわれ、ボールをあてがわれても、たったひとりでは、ただのゴムの球体に過ぎない。

厚子を気ぜわしいと思うこともないではないが、やはり、このうちにかわうそは一頭いたほうがいい。

電話が鳴った。

電話の声は今里いまさとだった。

大学時代からの友達で、かれこれ四十年のつきあいになる。宅次が倒れたとき、厚子に一番先に電話をかけさせたのも今里だった。

「言いたいことあったら、おれ、代りに言っつてやるぞ」

もともと E ジコウの挨拶などするつきあいではないが、それにしても唐突だった。

「お前、本当にいいのか」

ひと呼吸あつて、

「それだけは、嫌だつていつてたからさ。本当にいいのかと思つてね。まあ、こうなつたら、仕方ないよなあ」

一体なんのはなしだと問いつめると、今度は今里がうろたえた。

「お前、知らないのか」

厚子の発案で、宅次の今後のことを相談する集りにこれから出かけるところだという。メンバーは、次長の坪井つぼい、マキノ不動産と近所の銀行の支店長代理、主治医の竹沢、それに今里だという。

厚子は庭をつぶしてマンションを建て、借入れた銀行に管理してもらつて、若手行員たちの社宅にしたいと考えているらしい。

宅次は、頭のなかで、ふくれ上つてゆくのが判わかつた。五人の男たちに囲まれている厚子が見えて来た。

高く盛り上げた夏蜜柑の胸を突き出し、黒光りする目を躍らせて、(ウ) 健気な妻の役を生き生きと演じているに違いない。それにしても五人は多過ぎる。次長の坪井が何の役に立つというのだ。学生時代に見た一枚の絵が不意に浮かんで来た。

あれは (注2) 梅原だったか (注3) 劉生だったか。白く濁ったビニール袋をかぶった脳味噌では思い出せないが、構図は覚えてる。

かなり大きい油絵で、画面いっぱい旧式の牛乳瓶、花、茶碗、ミルクポット、食べかけの果物、パンの切れっぱし、首をしめられてぐったりした鳥が、卓上せましとならんでいた。

題は「獺祭図」である。

宅次は、この字が読めず意味も判らなかった。

うちに帰り辞書をひいて、やっとわかったのだが、これはかわうそのお祭りだという。

かわうそは、いたずら好きである。食べるためでなく、ただ獲物をとる面白さだけで沢山の魚を殺すことがある。

殺した魚をならべて、たのしむ習性があるというので、数多くのものをならべて見せることを獺祭図というらしい。

火事も葬式も、夫の病気も、厚子にとっては、体のはしゃぐお祭りなのである。

宅次は、牛乳瓶のうしろで死んでいる鳥が見えて来た。鳥は目をあいて死んでいたが、あの子は目をつぶっていた。

星江は、三つで死んだ宅次のひとり娘だった。

朝、出がけに、宅次は星江のおでこに自分の額をくっつけ、熱があるぞ、竹沢先生に往診を頼めよ、と声をかけて出張に出かけた。

三日後、出張先に電話がかかり、急性肺炎で (エ) 危篤だという。仕事もそこそこに帰京した時、星江の顔には白い布がかかって

いた。

厚子は、あの日竹沢医院に電話をしたが、取次の手違いで往診が次の日になったと泣いていた。竹沢医師も、新入りの見習い看護婦の手落ちということで、宅次に頭を下げた。宅次の父が、人を（オ）責めても死んだ人間は帰らないよ、と間に入り、ことを納めたのである。

（2）^{よむい}死児の齢をかぞえながら、忘れるともなく忘れていた頃、宅次は駅で、結婚のため田舎へ帰るその看護婦に逢った。

ためらいながら、宅次の横に立ち、

「黙って帰るつもりだったんですけど」

口ごもるオールドミス、といった感じの女を、はじめは誰か判らなかった。

「あの日、電話はなかったんですよ」

厚子が往診をたのんだのは次の日だったという。前日、厚子はクラス会だった。

宅次は、その夜、したたかに酒をのんだ。

玄関のガラス戸をあけるなり、厚子の頬を思い切り殴ってやる。そう思って帰ってきた。

宅次は殴らなかった。

なぜだったのか。思い出そうとすると、頭のうしろが、じじ、じじと鳴る。この女を殴らないほうがいい、とどこかで思ったから、黙って玄関へ入り、酒の勢いで眠ったのだろう。

庭にうすい墨がかかってきた。松も楓も^{かえで}五輪も、もうどつちでもよかった。

この時間が一番頭が重たくなる。いずれはみんな無くなって、モルタルの安手な四角い家が立ちふさがるのだ。

厚子の声が聞えてきた。

宅次の具合をたずねる隣りの奥さんに、何かしゃべっている。歌うような声で、明日のお天気を話すように宅次の血圧のはなしをしている。

宅次は立ち上った。

障子につかまりながら、台所へゆき、気がついたら庖丁ほうちょうを握っていた。(3) 刺さしたいのは自分の胸なのか、厚子の夏蜜柑の胸なのか判らなかつた。

「凄すばいじゃないの」

厚子だった。

「庖丁持てるようになったのねえ。もう一息だわ」

屈託のない声だった。左右に離れた西瓜すいかの種子たねみたいな、黒い小さな目が躍っていた。

「メロン、食べようと思つてさ」

宅次は、庖丁を流しに落すように置くと、ぎくしゃくした足どりで、縁側のほうへ歩いていった。首のうしろで地虫がさわいでいる。

「メロンねえ、銀行からのと、マキノからのと、どっちにします」

返事は出来なかつた。

写真機のシャッターがおりるように、庭が急に闇やみになった。

(設問のため文章を一部変更した。)

(注1) 半畳を入れながら 相手の言動をひやかすこと

(注2) 梅原 画家の梅原龍三郎のこと

(注3) 劉生

画家の岸田劉生のこと

問一 傍線部A～Eを漢字で丁寧^に記しなさい。

問二 傍線部(ア)～(オ)の読みがなをひらがなで記しなさい。

問三 傍線部(2)「死児の齡をかぞえながら」の「死児の齡をかぞえる」には、宅次が亡くなった娘の年齢を数える以外に、慣用句としての意味がある。その慣用句の意味として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 深い悲しみにおちいる

イ どうにもならないことを悔やむ

ウ 同じことを繰り返す

エ 思い出に浸る

問四 傍線部(1)「なにかに似ていると思ったのは、かわうそだった。」とあるが、宅次は厚子のどのような所がかわうそに似ているか、本文全体の内容から、四五字以上、五五字以内(句読点等を含む)で答えなさい。

問五

傍線部(3)「刺したいのは自分の胸なのか、厚子の夏蜜柑の胸なのか判らなかつた。」とあるが、宅次がこのように思ったのはなぜか、本文全体の内容から、一〇〇字以上、一三〇字以内(句読点等を含む)で答えなさい。

第二問 次の文章は、河合隼雄かわい はやおの『幼少児の親子関係の大切さ』である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

兵庫県に生野学園いくのがくえんという、不登校の高校生のための全寮制の高等学校がある。なかなかユニークな試みで、教えられることも多いが、その学園副理事長で精神科医である森下もりしたはじめ一先生が次のようなことを言われた。

不登校の重症の子どもたちに共通して見られる問題点として「誰かに同一視する」あるいは「同一視する人を見つける」ことが非常に困難だという事実がある、とのこと。

「同一視」とは、誰か他の人に対して、自分も「あの人のようになろう」と思ったり、その人の真似ばかりしたり、するような状態をいう。「なんだ、そんなことか」と思う人があるかもしれないが、これは人間の成長にとって非常に大切なことだ。もちろん、人間は一人一人異なるのだから、他人と同じになることなどできない。しかし、そこまで思いこんで努力してみることによって、「やっぱり、自分はこの人と違う」ということがわかり、自分自身の生き方というものがわかってくる。

そんな面倒なことをしなくても、最初から自分の個性を生かして努力すればいい、と思うかもしれないが、(1) 人間の個性などというものが、そんなに簡単に見つかるはずはない。誰か自分のほかに「生きた見本」を見せられて、あれだ、と思つて努力し、苦勞してこそ自分の個性が見えてくる。

不登校の子どものなかには、なかなか個性的で、いろいろと能力をもった子どももいるし、自分でもそれに気づきかけて伸ばそうとするのだが、それが自分のなかに根づき、それを土台として外界に打って出ていくという迫力や自信に欠ける。それを根づいたものにするには、馬鹿げて見えるような (2) 「同一視」の体験を経なくてはならないのである。

読者の皆さんも、自分の子どもだったころを思い出していただくと、先輩や教師、タレントなど、あるいは親戚の誰かなどを同一視の対象として選び、一生懸命になったことを思い出されるのに違いない。この経験をもたないと、人生に対して傍観者になり、何となくシラーツとしてくる。

同一視の最初は、自分の母親、父親、あるいはその役割をしてくれる人、ということになる。男も女も、まず母親（あるいは、母親役の人）を同一視の対象とする。それとまったく一体である限り大丈夫という経験をする。しかし、いつまでも母親と一体であるわけにいかない。そこで、そこから分離しようと努めることによって「自分」がわかってくる。このことを父親に対しても行うことによって成長してくる。幼少のときに、半意識的にこのような経験をしていると、思春期、青年期になって、それを乗り越えていくときに同一視の対象をうまく選択することができる。ところが、不幸にも幼少期に（3）そのような体験をしていない子どもは、なかなかそれが難しい。

思いついて身をまかせせる経験をもっていないと、いざというときに不安が先立ってしまう。あるいは、まったく途方もない存在でないと身をまかせられなくなるので、かえって（注1）麻原彰晃（松本智津夫）被告のような人を同一視の対象として選んでしまい、そこから抜け出すことができなくなってしまう。このような同一視がどれほど危険であるかは、（注2）オウム真理教の事件を見てもわかるであろう。同一視をして、その後そこから離れる、という体験を幼少のときからしてこないと、そのあたりの感じがわからなくなるのである。

森下先生は、ほんとうにサラリと「同一視の難しさ」と言われたが、これは長い期間にわたって多くの不登校児に接してきた人にして、はじめて言えることだと思った。そして、（4）これはやはり幼少児の親子関係——と言っても実の親子であるべきとは限らないが——の重要性をよく示している。これがしっかりしておれば他のこまごましたことにはあまり気を使うこともないのだ、と思った。

（注1） 麻原彰晃（松本智津夫） オウム真理教を始めた教祖。

（注2） オウム真理教 麻原彰晃（松本智津夫）が一九八〇年代に始めたカルト宗教集団。数々の凶悪事件を引き起こした。

問一 傍線部(1)「人間の個性などというものが、そんなに簡単に見つかるはずはない」とあるが、では筆者はどのようにすれば個性を身につけられると考えているか。本文の内容から、七〇字以上、八〇字以内(句読点等を含む)で答えなさい。

問二 傍線部(2)「同一視」の体験を経なくてはならない」とあるが、同一視の体験が困難な場合には、人にどのような問題が起これると筆者は考えているか、本文の内容から、五〇字以上、六五字以内(句読点等を含む)で答えなさい。

問三 傍線部(3)「そのような体験」が何を示しているのか、四五字以内(句読点等を含む)で答えなさい。

問四 傍線部(4)「これ」が何を示しているのか、本文中から、一〇字以内(句読点等を含む)で抜き出しなさい。

第三節 次の文章は、『山陰中央新報』平成二九年七月一〇日（共同通信配信）の論説「所有者不明土地問題／早急な対応が必要だ」

である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

(1) 持ち主が分からない土地が全国で約410万ヘクタールに上り、総面積では九州を上回るとする独自の推計を民間の研究会がまとめた。所有者が不明なため公共事業が実施できないなど影響が出ている。(2) 戦略的な対応が必要だ。

所有者不明とは、不動産の登記簿に現在の所有者が記されず、調べても誰が持っているか直ちに判明しなかったり、分かっても所有者に連絡がつかなかったりすること。全体の20.3%が不明で、種類ごとでは林地が4分の1と最も多く、次が農地の18.5%、宅地の14%だ。

不明の理由は(注1) 不動産登記は任意で、その重要性が認識されていないことが挙げられる。明治以降、人口が増加し土地の経済的な価値が高まっていた頃は、先祖伝来の土地を相続する意識は高かった。

戦後、農山村から働き手が都市に流出し、近年は人口も減少局面に入った。地価が下がり、利用価値も低下した山林や(ア) 棚田などを引き継ごうという意識も薄れ、相続人を決めないまま放置したり、承継しても登記しなかったりする傾向が強まったと言える。

この結果、自治体による(注2) 固定資産税の徴収ができないだけではない。道路建設やまちの再開発、農地の集約化、森林の

(イ) 伐採、災害復旧などで、所有者を捜すのに膨大な時間や費用がかかる。事業の遅れや中止だけでなく、不明土地を避け計画を変更するケースも多い。

今後、地方から都会に出ている不在地主らが(ウ) 代替わりの時期を迎える。このまま放置すれば所有者不明の土地が急増するという危機感を持ち、政府は早急に対策をまとめなければならない。

まず考えられるのは、不動産登記の促進策だ。死亡届が市町村に出された際に、相続の登記をしてくださいと伝えることから始める。登記の義務付けも視野に入れるべきだが、罰則を科すか、(注3) 登録免許税を(エ) 減免するといった誘導策の検討も必要だ

ろう。

登録免許税や固定資産税といった登記や土地保有の税負担を理由に相続したくない人もいる。こういった土地や所有者不明の土地を、所在する市町村や、(注4) 法人格を取得した自治会などの地元組織の管理に移す制度も有効だろう。

所有者の所在を調べるには市町村が持つ固定資産税の情報が生かせる。登記はしていないが、税金を支払っている相続人もいるためだ。

(注5) 空き家対策特別措置法では、固定資産税の納税記録を空き家の所有者を特定するため使うことを認めている。所有者の(才)探索でも同じ自治体の別の組織や、他の行政機関がこの記録を使えるように、法的な裏付けが求められる。

一方、所有者が不明のままでも事業実施のためできることは多い。例えば、東日本大震災からの復興事業では土地の財産管理人を選任して進めており、都道府県知事は農地の利用権を設定できる。これらのノウハウを自治体と共有した上で、公共性、緊急度が高い事業については、時間をかけずに事業を実施できる制度の確立が待たれる。

法務省の不動産登記のほか、土地の種類や利用目的によって農林水産省や林野庁、総務省などが土地情報を縦割りに持っている。これらを一元化し、利用しやすくすることも重要だ。

(設問のため文章を一部変更した。)

(注1) 不動産登記 国民の大切な財産である不動産(土地や建物)について、その位置、面積、所有者等の情報を、法務局の職

員(登記官)が専門的な見地から正しいのかを判断した上でコンピュータに記録すること。

(注2) 固定資産税 土地、家屋および償却資産などの固定資産の所有者に課される市町村税。

(注3) 登録免許税 登記を申請する際に、国(法務局)に納める税金。

(注4) 法人格 団体の名前で契約を結ぶ、登記を行うなど、人間と同様の権利・義務の主体となることができる資格。

(注5) 空き家対策特別措置法 空き家等に関する施策に関し、国による基本指針の策定、市町村による空き家対策計画の作成その他の空き家等に関する施策を推進するために必要な事項を定めた法律。

問一 傍線部(ア)～(オ)の読みがなをひらがなで記しなさい。

問二 傍線部(1)「持ち主が分からない土地が全国で約410万ヘクタールに上り、総面積では九州を上回る」とあるが、なぜ「持ち主が分からない土地」がこんなに多く存在するのか、その理由を本文の内容から、1000字以上、1200字以内(句読点等を含む)で説明しなさい。

問三 傍線部(2)「戦略的な対応が必要だ。」とあるが、筆者はどのような「対応」が必要だと考えているか、本文の内容から、1500字以上、1800字以内(句読点等を含む)で説明しなさい。